

〈新刊紹介〉

山口佳紀著『伊勢物語を読み解く——表現分析に基づく新解釈の試み——』

本書は、日本語学の立場から『伊勢物語』の言語表現を読み解き、従来の注釈とは異なる新たな解釈を提示しようとするものである。

内容は次のとおりである。「序章 本書のはじめに」, 「第一章 第九段 (東下り)」, 「第二章 第一〇段 (たのむの雁)」, 「第三章 第一二段 (盗人)」, 「第四章 第二二段 (千夜を一夜に)」, 「第五章 第二三段 (筒井筒)」, 「第六章 第二四段 (梓弓)」, 「第七章 第二六段 (もろこし船)」, 「第八章 第四九段 (若草)」, 「第九章 第五〇段 (鳥の子)」, 「第一〇章 第五一段 (菊)」, 「第十一章 第六〇段 (花橘)」, 「第十二章 第六二段 (こけるから)」, 「第十三章 第六四段 (玉すだれ)」, 「第十四章 第七五段 (海松)」, 「第十五章 第八三段 (小野)」, 「第十六章 第八五段 (目離れせぬ雪)」, 「第十七章 第一一三段 (短き心)」, 「第十八章 第一一四段 (芹河行幸)」。末尾に「あとがき」, 「索引」を付す。(田中佑)

(2018年2月10日発行 三省堂刊 A5判縦組み 408頁 5,400円+税 ISBN 978-4-385-36165-9)

栗田奈美著『視覚スキーマを用いた意味拡張動機づけの分析——完遂を表す複合動詞「～きる」「～ぬく」「～とおす」の場合——』

本書は、認知言語学的な観点から、完遂を表す複合動詞「～きる」, 「～ぬく」, 「～とおす」について論じ、人間の事態把握と言語表現選択との関係の一端を明らかにしようとするものである。また、日本語教育の現場における本書の知見の有用性とその可能性についても論じている。本書は、筆者が2014年に青山学院大学大学院に提出した博士論文がもとになっている。

本書の構成は、「序論」, 「第1章 複合動詞研究の概観」, 「第2章 多義研究の概観」, 「第3章 本動詞のスキーマとその意味」, 「第4章 後項動詞のスキーマとその意味」, 「第5章 コーパスに見る「～きる」「～ぬく」「～とおす」」, 「第6章 日本語教育への応用」, 「結論」, 「謝辞」。末尾に「事項・人名索引」, 「参考文献・辞書」, 「図表一覧」を付す。

なお、本書はJSPS平成29年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費・学術図書)の交付(課題番号17HP5059)を受けている。(阿久澤弘陽)

(2018年2月15日発行 春風社刊 A5判縦組み 538頁 5,500円+税 ISBN 978-4-86110-564-7)

定延利之編『限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究』

本書は、民間話芸調査研究プロジェクトの活動の一環として執筆された、編者が「わたしのちょっとおもしろい話コーパス」と呼ぶコーパスに関連する論文をまとめたもの

である。

「序章 限界芸術「面白い話」と音声言語・オラリティ（定延利之）」に続く、第1章から第4章の4章で構成される。「第1章 「わたしのちょっと面白い話」の面白さ」には、「1 パブリックな笑い、プライベートな笑い——ジョークと体験談に見る笑いの種類と文化の関係——（山口治彦）」、「2 「ちょっと面白い話」を通して現代社会の「笑いのコミュニケーション」を考える（瀬沼文彰）」、「3 やりとりから生まれる面白さについて——「ちょっと面白い話」のツッコミを中心に——（ヴォーゲ＝ヨーラン）」が、「第2章 「わたしのちょっと面白い話」を用いた日本語研究」には、「1 笑い話における言語・非言語行動の特徴——関西の一般人と関西芸人の比較から——（金田純平・波多野博顕・乙武香里）」、「2 フィラー「コー」における心内情報処理（大工原勇人）」、「3 話し言葉における「スゴイ」の副詞用法についての一考察（羅米良）」、「4 語りの構造をめぐって——「わたしのちょっと面白い話」から見えてくること——（羅希）」が、「第3章 「わたしのちょっと面白い話」を外国語に訳す」には、「1 「わたしのちょっと面白い話」のフランス語訳をめぐって——フランス語訳をめぐる「後思案」——（山元淑乃）」、「2 「わたしのちょっと面白い話」の中国語訳をめぐって（新井潤・孟桂蘭）」、「3 「わたしのちょっと面白い話」の英語訳をめぐって——日英の言語文化的異同とユーモア——（森庸子・アンソニー＝ヒギンズ）」、「4 「わたしのちょっと面白い話」のロシア語訳をめぐって（イリーナ＝プーリク・奥村朋恵）」が、「第4章 「わたしのちょっと面白い話」と日本語教育」には、「1 「わたしのちょっと面白い話」コンテストに対する学習者の意識調査（宿利由希子・昇地崇明・仁科陽江・萩原順子・櫻井直子）」、「2 「わたしのちょっと面白い話」から見た話し始めと話し終わり（三枝令子）」、「3 わたしのちょっと面白い話」を題材とした日仏遠隔授業の試み（林良子・国村千代）」、「4 エスニック・ジョークと倫理（櫻井直子・ダヴィッド＝ドゥコーマン・岩本和子・林良子・楯岡求美）」、「5 プロフィシェンシーから見た「面白い話」（鎌田修）」が掲載されている。末尾に「執筆者紹介」と「索引」を付す。（阿久澤弘陽）

（2018年2月16日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 480頁 8,800円＋税 ISBN 978-4-89476-905-2）

城綾実著『多人数会話におけるジェスチャーの同期——「同じ」を目指そうとするやりとりの会話分析——』

本書は、人びとがそれぞれの場面に固有の目標を叶えたり課題に対処したりする中で達成される「ジェスチャーの同期」を、会話分析の手法を用いて分析し、その達成条件や位置および相互行為上の効果を明らかにすることを目的としている。筆者が2012年度に滋賀県立大学大学院人間文化科学研究科に提出した博士論文「相互行為におけるジェスチャーの同期とその産出過程」とその後に関した論文をもとに加筆修正を加えたものである。

本書の構成は、「第1章 序論—人びとにとっての「同じ」とは何か」、「第2章 「同

じ」をめぐる先行研究], 「第3章 研究方法とデータ」, 「第4章 人びとにとってのジェスチャーの同期」, 「第5章 ジェスチャーの同期が成し遂げられる位置」, 「第6章 ジェスチャーの同期により達成される行為・活動」, 「第7章 ジェスチャーの同期を利用することで生じうる効果」, 「第8章 結論—「同じ」をめぐる人びとの合理性と柔軟さの探求」。末尾に, 「参考文献」, 「あとがき」, 「索引」を付す。

なお, 本書は, 2017年度 JSPS 研究成果公開促進費(学術図書)の交付(課題番号 17HP5264)の助成を受けている。(阿久澤弘陽)

(2018年2月16日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 240頁 5,800円+税 ISBN 978-4-89476-906-9)

陳奕廷・松本曜著『日本語語彙的複合動詞の意味と体系——コンストラクション形態論とフレーム意味論——』

本書は, 語彙的複合動詞を研究対象とし, コンストラクション形態論およびフレーム意味論に基づいて, 個々の複合動詞の形成メカニズムを論じている。著者の一人である陳奕廷が2015年に神戸大学大学院人文学研究科に提出した博士論文『日本語の語彙的複合動詞の形成メカニズムについて——中国語との比較対照と合わせて——』に, 松本曜と共に加筆・修正を施したものである。

本書の構成は, 「まえがき」, 「表記・略語」に続き, 「第1章 序論」, 「第2章 語彙的複合動詞とその研究」, 「第3章 コンストラクション形態論とフレーム意味論」, 「第4章 コンストラクションと複合動詞 I——階層的スキーマネットワークと意味関係スキーマ——」, 「第5章 コンストラクションと複合動詞 II——コンストラクション的イデオムと語彙的コンストラクション——」, 「第6章 フレームに基づく複合動詞の考察 I——語彙の意味フレームと複合動詞の組み合わせ——」, 「第7章 フレームに基づく複合動詞の考察 II——事象参与者と複合動詞の項——」, 「第8章 主語不一致複合動詞の形成メカニズム」, 「第9章 本書の意義と今後の展望」。末尾に「付録 日本語語彙的複合動詞リスト」, 「参考文献」, 「事項索引」, 「複合動詞索引」を付す。

なお, 本書は, JSPS 科学研究費補助金: 研究成果公開促進費(学術図書)(課題番号: 17HP5075)の助成を受けている。(阿久澤弘陽)

(2018年2月16日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 364頁 8,500円+税 ISBN 978-4-89476-907-6)

ダニエル・ロング著『小笠原諸島の混合言語の歴史と構造——日本元来の多文化共生社会で起きた言語接触——』

本書は, 小笠原諸島において先住民とのコミュニティ言語として1830年から現在に至るまで用いられてきた様々な形の英語を概括しようとするものである。

内容は次のとおりである。「第1部 日本語到来以前」には「第1章 小笠原諸島の言語史」, 「第2章 小笠原諸島における言語変種」, 「第3章 日本語が入ってくる以前の英

語」。「第2部 日本語到来後」には「第4章 社会歴史的概要：日本語時代の初期」,「第5章 19世紀後半のポニン英語」。「第3部 20世紀前半」には「第6章 社会歴史的概要：20世紀初頭の英語」,「第7章 20世紀初頭のポニン英語と戦前の混合言語」。「第4部 米軍時代」には「第8章 社会歴史的概要：米海軍時代の英語」,「第9章 ネイビー世代のポニン英語」,「第10章 戦後の小笠原混合言語」。「第5部 返還後」には「第11章 欧米系島民が使う日本語の実態」,「第12章 他の孤立した言語変種の社会との比較」,「第13章 返還後における英語,日本語および混合言語」,「第14章「小笠原混合言語」は本当に「言語」なのか——5つの側面からの検証——」,「第15章 世界遺産時代の小笠原ことば」。末尾に「謝辞」,「参考文献」,「索引」を付す。

なお、本書は JSPS 平成 29 年度科学研究費助成事業研究成果公開促進費（課題番号 17H5068）による助成を受けて刊行されたものである。（田中佑）

（2018年2月16日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 432頁 8,000円+税 ISBN 978-4-89476-904-5）

田中巳榮子著『近世初期俳諧の表記に関する研究』

本書は、江戸時代初期の俳諧集を資料とし、表記の面を中心に考察を加えた論考である。筆者が2013年に関西大学に提出した博士論文『近世初期俳諧の表記に関する研究』に、新たに二つの論文を加えて、全体にわたり加筆訂正をしたものである。

本書の構成は、「序文（乾善彦）」,「序章 本書の目的と構成」,「第一章 振り仮名が付される漢字表記語と表記形態」,「第二章 近世初期俳諧の用字・用語考証」,「第三章 仮名遣いから見た近世初期俳諧集」,「終章 本書の結論と今後の課題」。末尾に、「あとがき」,「資料編」,「索引」を付す。

なお、本書は、JSPS 平成 29 年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）（研究成果公開促進費 課題番号 17HP5059）の交付を受けている。（阿久澤弘陽）

（2018年2月25日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 402頁 10,000円+税 ISBN 978-4-7576-0867-2）

真田信治著『標準語史と方言』

本書は、筆者の既発表論文をまとめて編まれた、全4巻からなる「日本語の動態」シリーズの第1巻である。本書では、近代日本語における標準語の成立過程と、それをめぐる地域社会での葛藤、そして、標準への〈集中〉と〈逸脱〉といった二つのベクトルの交錯の様相に関する論考が集成されている。

「まえがき」,「図・表リスト」にはじまり、「1.「標準語」とは何か」,「2.標準語・共通語」,「3.江戸語はいつ共通語になったか」,「4.『夢酔独言』に見る末期江戸語の方言」,「5.国民国家としての「国語」へ」,「6.方言の盛衰 大阪ことば素描」,「7.標準への集中と逸脱」,「8.階層性から一律化へ、そして標準的に 五箇山親族呼称の60年」,「9.日本学のゆくえ」,「10.“山田孝雄”のこと」,「11.国語教育のイデオロギー 方言と学校

教育], 「12. 方言の情況と日本語教育」, 「13. 「臨床ことば学」への期待」, 「14. 私が勧めるこの1冊『言語史研究入門』亀井孝・山田俊雄【編】」, 「15. 名著と遭い、人と会う」の15章構成。末尾に、「出典一覧」, 「あとがき」, 「索引」を付す。(阿久澤弘陽)
(2018年3月9日発行 ひつじ書房刊 四六判横組み 208頁 1,800円+税 ISBN 978-4-89476-915-1)

金智賢著『現代日本語と韓国語における条件表現の対照研究——語用論的連続性を中心に——』

本書は、現代日本語と韓国語の条件表現に関する対照研究を通してそれぞれの言語における条件表現の特徴を明らかにし、通言語的な現象としての条件表現を再考しようとするものである。

内容は次のとおりである。「まえがき」に続き、「第1章 予測条件と前提条件の連続性」, 「第2章 前提条件と主題の連続性」, 「第3章 予測条件と継起の連続性」, 「第4章 継起と理由の連続性」, 「第5章 日本語の「ト」について」, 「第6章 韓国語の「eoya」について」, 「第7章 譲歩条件の「逆説性」について」, 「第8章 条件の「テハ」と「eoseoneun」」, 「第9章 結論」。末尾に「参考文献」, 「言語形式索引」, 「事項索引」を付す。

なお、本書は、JSPS 科研費 26370489 の助成を受けた研究成果を書籍化したもので、ひつじ研究叢書〈言語編〉第150巻として刊行された。(田中佑)

(2018年3月14日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 208頁 6,500円+税 ISBN 978-4-89476-876-5)

古賀悠太郎著『現代日本語の視点の研究——体系化と精緻化——』

本書は、「(て) やる／(て) くれる」文、「行く／来る」文、ヴォイス(他動詞文／受動文)、中国語のヴォイスを主な考察対象に、「視点研究の精緻化」と「視点研究の体系化」を行なうことで、言語に視点がどのように関与しているかを明らかにすることを目的としている。筆者が、2013年11月に神戸市外国語大学大学院に提出し、2014年3月に学位を授与された博士論文「現代日本語の「視点」の体系に関する研究——移動動詞文、授与動詞文、受動文を中心に——」に、大幅に加筆・修正を加えたものである。

本書の構成は、「第1章 言語における「視点」とは」, 「第2章 先行研究の整理」, 「第3章 「やる／くれる」文、「行く／来る」文と視点」, 「第4章 授与補助動詞「てやる／てくれる」文と視点」, 「第5章 ヴォイスと視点」, 「第6章 「視点」に関する日中対照研究 ヴォイスを中心に」, 「第7章 視点研究の体系化の試み」, 「第8章 本書のまとめ」。末尾に「参考文献」, 「あとがき」, 「索引」を付す。

なお、本書は、台湾・静宜大学学術研究計画(新任教師型)「現代日本語の視点の研究——体系化と精緻化——」(課題番号: PU106-11100-B05)の助成を受けている。(阿久澤弘陽)

(2018年3月15日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 244頁 6,400円+税 ISBN 978-4-89476-861-1)

佐藤武義・横沢活利著『連濁の総合的研究』

本書は日本語特有の言語現象として国内外の研究者が注目する「連濁」の全容を解明するため、連濁語・非連濁語をデータベース化し、その発生・回避の要因を探ろうとするものである。

本書の構成は次のとおりである。「序章」においては本研究が構築した「現代新国語辞典(学研)データベース」,「日葡辞書データベース(対応表)」の概要を示し,「第1章 先学の連濁研究」,「第2章 連濁発生・回避の要因」,「第3章 連濁の特色」,「第4章 連濁と語種」,「第5章 連濁と話し手」,「第6章 連濁現象の流動性」,「第7章 連濁に関する諸問題」と続く。「終章」では両データベースの構築・検索結果・考察がまとめられている。末尾に「あとがき」,「索引」,「著者略歴」を付す。(前田直子)

(2018年3月15日発行 勉誠出版刊 B5判横組み・CD-ROM付 230頁 10,000円+税 ISBN 978-4-585-28038-5)

高橋敬一著『今昔物語集の構文研究』

本書は,「構文」を文の構造と捉え,現代語研究の視点から,平安時代末期の言語を反映していると思われる『今昔物語集』の構文を考察しようとするものである。

内容は次のとおりである。「はじめに」に続き,「第一部 文字・表記研究」には「第一章 今昔物語集の仮名書自立語と欠文」,「第二章 今昔物語集の漢字の用字法」,「第三章 今昔物語集の避板法・変字法」。「第二部 構文研究」には「第一章 今昔物語集の助動詞の相互承接(附 平安鎌倉時代和文の助動詞の相互承接)」,「第二章 今昔物語集の「テ侍り」と「テ候ふ」——アスペクト的性格の検討——(附 宇治拾遺物語の「て侍り」と「て候ふ」)」,「第三章 今昔物語集の「一居ル」と「一テ居ル」——状態化形式(状態化アスペクト形式)の定着——(附 宇治拾遺物語の補助動詞「ある」)」,「第四章 今昔物語集の連体形終止文——「ケル終止文」の定着——」,「第五章 今昔物語集の「ムトス終止文」——「欲」字の訓読との関係——(附 宇治拾遺物語の助動詞「むず」)」,「第六章 説話の話末形式句——「トゾ」「トナム」「トカ(ヤ)」——」。「第三部 用語・文体研究」には「第一章 今昔物語集の漢語サ変動詞」,「第二章 今昔物語集の漢語サ変動詞と和語動詞(附 宇治拾遺物語の「死ぬ」「失す」「死す」)」,「第三章 今昔物語集の仏教用語の受容」,「第四章 今昔物語集の副詞」。「第四部『今昔物語抄』の本文研究」には「第一章 今昔物語集諸本との関係」,「第二章 今昔物語集異本との関係」。末尾に「初出一覧」,「あとがき」,「索引」を付す。(田中佑)

(2018年3月20日発行 勉誠出版刊 A5判縦組み 344頁 10,000円+税 ISBN 978-4-585-28037-8)

下地理則著『南琉球宮古語伊良部島方言』

本書は,琉球諸語に属する南琉球宮古語伊良部島方言の記述文法書である。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の研究活動の一環として企画された,「シリー

ズ「記述文法」の第一弾である。

本書の構成は、「略語リスト」に続き、「第1章 伊良部島方言の概要」,「第2章 音韻論」,「第3章 記述の諸単位」,「第4章 名詞句」,「第5章 名詞類」,「第6章 指示詞と疑問詞」,「第7章 動詞の構造」,「第8章 PC語群 (Property Concept words)」,「第9章 述語句の構造」,「第10章 助詞」,「第11章 単文の構文論」,「第12章 複文」。末尾に、「引用文献」,「あとがき」,「索引」を付す。(阿久澤弘陽)

(2018年3月26日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 368頁 5,400円+税 ISBN 978-4-87424-760-0)

真田信治監修『関西弁事典』

本書は、関西弁の全容をわかりやすく解説した総合的・本格的な「事典」である。

本書の構成は次のとおりである。「A 総説」は関西弁の歴史・地理・社会階層・研究史・言語地図,「B 地域別概説」は京都・滋賀・大阪・兵庫・奈良・和歌山・三重の方言概説,また河内・泉州・神戸・播州・淡路・伊賀・志摩・丹波・若狭の言葉,「C ジャンル別概説」は音声(音便)・アクセント・イントネーションのほか,否定・可能・断定・自称詞・対称詞・敬語・あいさつ表現・依頼表現・談話展開・あいづち・オノマトペ・常套句,「D 文芸・芸能と関西弁」は近世上方語・浄瑠璃・方言川柳・方言かるた・作家・演芸・話芸・お笑い,「E 関西弁の位相」は御所ことば・船場ことばなど,「F 関西弁の情況」は関西弁の規範と多様性・アイデンティティ・関西弁のイメージなど,「G 関西弁運用の諸相」は方言土産(グッズ)・年中行事などのほか東京に取り込まれた関西弁・ツイッターの関西弁・エセ関西弁など,「H 関西弁施策」は国語教育・日本語教育・放送との関わり,「I 関西弁の変容」はネオ関西弁・関西共通語など,その範囲は多岐に及ぶ。ほかに23のコラム,末尾には「関西弁の語句」,「主要研究者」,「主要参考文献解題」,「関西弁関連文献一覧」,「専門用語解説」,「事項索引」,「語句索引」,「監修者・編集委員紹介」を付す。(前田直子)

(2018年3月28日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 516頁 6,200円+税 ISBN 978-4-89476-848-2)

迫田幸栄著『現代日本語における分析的な構造を持つ派生動詞——「してある」「しておく」「してしまう」について——』

本書は,「してある」,「しておく」,「してしまう」の持つ意味・機能を明らかにし,それらの形態論的な位置づけについて再考することを目的とした論考である。筆者が2009年に別府大学に提出した博士論文「現代日本語における分析的な構造をなす派生動詞——「してある」「しておく」「してしまう」について——」に加筆修正を行ったものである。

本書の構成は,「凡例」に続き,「第1章 序論」,「第2章 「してある」」,「第3章 「しておく」」,「第4章 「してしまう」」,「終章」。末尾に「参考文献」,「あとがき」,「索引」を付す。

なお、本書は、2017年度名城大学総合研究所出版助成を受けている。(阿久澤弘陽)
(2018年3月29日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 272頁 6,600円+税 ISBN 978-4-89476-909-0)

荒川清秀著『日中漢語の生成と交流・受容——漢語語基の意味と造語力——』

著者が前著『近代日中学術用語の形成と伝播』（白帝社、1997年）と前後して書いた、日中漢字漢語問題、近代漢語の生成と交流・受容に関する論考をまとめたものである。前著が地理学用語に限定したものであったのに対し、本書は「空気」、「健康」、「電話」、「盆地」、「化石」、「割礼」や『六合叢談』の天文、地理用語等、具体的な語の分析を通し、日中で漢語がつくられ、伝わる際の法則について考察している。

内容は次のとおりである。「解題—まえがきに代えて」に続き、「第1章 日中漢語の交流と受容」には「1 日本漢語の中国語への流入」、「2 日中漢語の交流と受容」、「3 日本の訳語・中国の訳語」、「4 近代日中学術用語の研究をめぐって」。「第2章 近代漢語におけるロプシャイト英華字典の位置」には「5 ロプシャイト英華字典の訳語の来源をめぐって——地理学用語を中心に——」、「6 ロプシャイト英華字典と英和対訳袖珍辞書」。「第3章 各論」には「7 「空気」語源考——語基の造語力と伝播のタイプをめぐって——」、「8 「健康」の語源をめぐって」、「9 「電」のつくことば——「電話」を中心に——」、「10 『六合叢談』における地理学用語」、「11 外国地名の意識——「劍橋」「牛津」「聖林」「桑港」——」。「第4章 日中漢語語基の意味と造語力」には「12 現代日本語における漢字の意味——特に同訓異字について——」、「13 漢語語基の意味と造語力——同訓異字の漢字を中心に——」、「14 日中両国語における漢語語基の意味と造語力」、「15 複合漢語の日中比較」。「第5章 日中同形語について」には「16 中国語と漢語——文化庁『中国語と対応する漢語』の評を兼ねて——」、「17 日中同形語を考える視点——文体の問題——」。末尾に「文献目録」、「資料目録」、「辞書目録」、「あとがき」、「索引」を付す。(田中佑)

(2018年3月30日発行 白帝社刊 A5判横組み 456頁 4,800円+税 ISBN 978-4-86398-276-5)

近代語学会編『近代語研究 20』

本書は以下の33論考を収録する。「漢語の品詞としての広がりについての一考察——室町時代の三大口語資料を中心に——(坂詰力治)」、「『玉塵抄』の漢語—「緩怠」—(山田潔)」、「ロドリゲス『日本大文典』の「肯定」の副詞について——〈真偽〉・〈蓋然〉・〈程度〉の関連性——(田和真紀子)」、「近世における「是非(に／とも／ともに)」——副詞用法を中心に——(玉村禎郎)」、「近世のリテラシーと漢字仮名交り文(矢田勉)」、「五井守香と『和漢通用集』(佐藤貴裕)」、「「ずくめ」は「尽くめ」にあらず(坂梨隆三)」、「倭訓栞と百人一首(平井吾門)」、「明和洒落本の一・二人称代名詞(小松寿雄)」、「日本語史資料としての江戸時代中後期狂言詞章——鶯流狂言詞章保教本を起点として——(米田達郎)」、「音節構造史から見た江戸語の連母音訛(肥爪周二)」、「式亭三馬「風流稽古三弦」翻刻(続)(土屋信一)」、

「式亭三馬の言語描写——センボウを資料として——（長崎靖子）」、「馬琴の用語（二）——久恋・魚米・^{あの}時遅し^{この}這時速し——（鈴木丹士郎）」、「路女の日記における敬称の使い方——「殿」を中心に——（大久保恵子）」、「八木美穂著述の仮名字体——『約古事記伝』『約古事記伝之序』を対象に——（内田宗一）」、「人情本を利用した挨拶表現研究（序説）（田島優）」、「江戸時代末期人情本にみられる可能表現について——後期江戸語における可能動詞の使用実態——（浅川哲也）」、「成城〈乙〉本「縄ない抜書」の資料的性格と言語（小林千草）」、「近代日本語資料としての渋沢・杉浦『航西日記』——左振仮名を中心に——（荒尾禎秀）」、「「ほしいくらゐもたないでも」という表現について——続・宮沢賢治の標準語の語法——（小島聡子）」、「名古屋市におけるバス停留所名の考察（鏡味明克）」、「近・現代の謙讓語形式の消長とその背景——「お／ご〜」の四形式——（伊藤博美）」、「『大漢和辞典』所収現代中国語の依拠資料——石山福治の中日辞典とその典拠となった華英辞典——（橋本行洋）」、「大正期『文藝春秋』の記事に見られる言語規範意識（新野直哉）」、「『浮雲』の助詞「なんぞ」「なぞ」「など」について（北澤尚）」、「『哲学字彙』付録「清国音符」の編纂目的と用法についての検討——井上哲次郎の日記及び旧東京大学の漢文教育との関わりから——（真田治子）」、「『改正増補英和对訳袖珍辞書』と異なる『英仏単語篇注解』の訳語について（3）（櫻井豪人）」、「中国語会話書における二重否定形式当為表現「ネバナラヌ類」とその周辺——明治以降昭和20年までの資料を中心に——（園田博文）」、「近代初期における「じつに」「まことに」「ほんとうに」の用法（市村太郎）」、「評価副詞の成立と展開に見られる変化の特徴（林禎映）」、「辞の複合」の諸相（田中章夫）」、「『日葡辞書』の「または」（今野真二）」。

末尾に執筆者略歴を付す。（前田直子）

（2018年3月30日発行 武蔵野書院刊 A5判縦組み 712頁 18,000円＋税 ISBN 978-4-8386-0708-2）

加藤大鶴著『漢語アクセント形成史論』

本書は、文献資料に記された声点の調査を通じて、漢字声調が日本語のアクセント体系に融和し漢語アクセントを形成していく様子を、音韻史の流れの中にモデルとして捉えることを目的とした論考である。筆者が早稲田大学大学院に提出した博士論文「漢語アクセントの史的形成についての研究」を改稿したものである。

本書の構成は、「はしがき」、「凡例／出典・準拠本一覧／参考資料一覧」に続き、「序章 本書の目的と構成」、「第1章 字音声点を分析する上での基礎的問題」、「第2章 原音声調の継承と変容」、「第3章 漢語アクセントの形成」、「終章 原音声調から漢語アクセントが形成されるまで」。末尾に、「参考文献」、「本書と既発表論文との関係」、「あとがき」、「中国語訳要旨」、「英語訳要旨」、「事項・書名・人名索引」、「著者名索引」、「語彙索引」を付す。（阿久澤弘陽）

（2018年3月31日発行 笠間書院刊 A5判横組み 472頁 11,000円＋税 ISBN 978-4-305-70862-5）

清地ゆき子著『近代訳語の受容と変容——民国期の恋愛用語を中心に——』

本書は、日本の文学作品で創出された恋愛用語が中国語に移入され、旧態依然とした儒教思想や婚姻制から解放されていく社会背景の中で受容・変容される様相を、現代中国語への継承と影響も視野に入れて論じたものである。

本書の構成は次のとおりである。「序章」の後、「第1章 恋愛用語の受容と変容の背景」では民国期の中国における西洋の恋愛思潮の受容について、「第2章 新概念の受容と古典語の転用」では中国語と日本語における近代訳語「恋愛」の成立、「第3章 和語と和製漢語の中国語への移入」では「初恋」と「失恋」、「第4章 類義語の発生」では「恋人」と「愛人」、「第5章 近代訳語の意味の変遷と収斂」では「自由恋愛」、「第6章 異形同義語の成立」では和製漢語「三角関係」、「三角恋愛」、「第7章 近代訳語の変容」では和製漢語「同性愛」、「同性恋愛」、「同性恋」を取り上げ、「終章」を収める。末尾に「あとがき」、「索引」、「著者略歴」を付す。(前田直子)

(2018年4月10日発行 白帝社刊 A5判横組み 256頁 4,200円+税 ISBN 978-4-86398-302-1)

築島裕著『築島裕著作集 第四冊 国語史と文献資料』

築島裕東京大学名誉教授の著作集全8分冊の第4巻となる本書は「国語史と文献資料」と題し、研究史・通史、国語史関係、文章・文体史、文献資料論に関する次の23論文を収録する。「訓点語研究の歴史」、「(昭和四十三・四十四年における国語学界の展望) 国語学史・資料」、「高山寺経藏の調査と国語史学」、「『国史大辞典』と国語学項目」、「(国語学の五十年) 文章・文体」、「日本漢字音研究の回顧と展望」、「漢文訓讀研究の将来」、「訓点語学会回顧」、「日本語の起源」、「国語史」、「中古の国語」、「国語史上の源氏物語」、「鎌倉時代の言語体系について」、「『玄奘三藏繪] 詞書と国語史」、「佛教と国語史」、「上代語と平安時代漢文訓讀文との関係について」、「中古漢文訓讀文の文構造」、「伊勢物語の文脈」、「日本語の文体」、「古い言語の記録」、「上代の漢字文献」、「本邦における漢文の展開」、「日本における漢字漢文の受容について」。(前田直子)

(2018年4月25日発行 汲古書院刊 A5判縦組み 445頁 15,000円+税 ISBN 978-4-76293-624-1)

藤田保幸編『言語文化の中世』

本書は、「言語文化」を表現の文化と捉え、「中世」にかかわる様々な表現の営為とそれを支える言語資料・言語意識を考察する論文を集成したものである。平成26～28年度にかけての龍谷大学仏教文化研究所の研究プロジェクトにおける共同研究「龍谷大学図書館蔵中世国語資料の研究」による研究成果のうち、龍谷大学善本叢書『中世国語資料集』に収めきれなかった論考が収録されている。

内容は次のとおりである。「まえがき」に続き、「第一章 中世の資料と言語」には「『職原抄』訓点本の資料性について——龍谷大学本を手懸かりとして——(宇都宮啓吾)」、「龍谷大学

図書館蔵『異名盡并名字盡』の語彙について（三宅えり）, 「親鸞自筆『教行信証』に付された角点の基礎的研究（能美潤史）, 「龍谷大学図書館写字台文庫蔵『舟水と詞集』について（檜垣駿）, 「鎌倉時代の言語規範に関する一考察——「古」なるものへの意識をめぐる——（山本真吾）。「第二章 中世の表現」には「建久六年民部卿経房家歌合の俊成歌について（安井重雄）, 「定家の歌語意識と改作——「関の月影」の歌をめぐる——（溝端悠朗）, 「官職名を詠む和歌（佐藤明浩）, 「『源平盛衰記』烏帽子折物語の成立過程（浜畑圭吾）, 「天草版『平家物語』の感嘆符——付加の規則と物語解釈——（中本茜）, 「『エソポのハプラス』本文考——「狐と野牛の事」の yuguetano vchini をめぐって——（水谷俊信）, 「中世王朝物語における音楽——改作本『夜寝覚物語』における箏の琴と琵琶をめぐる——（藤井華子）, 「中世人の「夢の浮橋」——『山路の露』と紫式部墮地獄説話——（亀井久美子）。「第三章 中世へのまなざし」には「カール・フローレンツ『日本文学史』の「中世」理解（藤田保幸）, 「第二次大戦下の小林秀雄と〈中世〉——同時代言説を視座として——（田中裕也）。

なお、本書は龍谷学会学術図書出版助成金を受け、龍谷叢書 43 として刊行されたものである。（田中佑）

（2018年4月30日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 328頁 10,000円＋税 ISBN 978-4-7576-0875-7）

国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究 37』

特集として文法と語彙に関する論考が集められる。

内容は次のとおりである。まず、特集には、「奈良時代語における話者願望マクホシをめぐる通時的諸相（釘貫亨）, 「上代語の潜伏疑問文をめぐる——「知らず」構文の場合——（高山善行）, 「上代における動詞ホル（欲）の活用（岡村弘樹）, 「動詞「ありく」の文法化——平安時代語のアスペクト表現における一考察——（竹内史郎）, 「非変化の「なる」の史的展開（青木博史）, 「「遅かれ早かれ」類の成立と定着について（北崎勇帆）, 「前接要素・形態の特徴からみる「気がする」の意味変化（藏本真由）, 「近世期尾張方言資料における当為表現・禁止表現（湯浅彩央）, 「東海・東山地方における推量辞ズラの成立経緯と表現性（彦坂佳宣）」が収められている。その他の論考には、「サク [咲]・サカユ [栄]・サカル [盛]（蜂矢真郷）, 「上代・中古を中心とするマフ型動詞・バフ型動詞——合わせてタブ（賜）とタマフ（賜）の成立と構成について——（中垣徳子）, 「字訓史記述小試（今野真二）, 「『色葉字類抄』「雑物部」の研究（藤本灯）, 「『日本語歴史コーパス』による中古および中世における日記文学の比較（村田菜穂子・前川武）, 「中世以降の「シウ（シユウ）」「シユ」の呉音形をめぐる（石山裕慈）, 「二字漢語「一山」の連濁とその歴史——漢語連濁の一例として——（山田昇平）, 「幕末志士の一漢語——「周旋」をめぐる——（浅野敏彦）, 「明治・大正期における否定応答詞——「いや」「いえ」「いいえ」「ううん」を中心に——（野口美美）, 「キリスト教における「栄光」（吉野政治）。末尾に「語彙索引」, 「人名・書名・事項索引」が付く。（田中佑）

(2018年5月7日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 368頁 10,000円+税 ISBN 978-4-7576-0868-9)

許哲著『江戸・東京語の否定表現構造の研究』

本書は、近代における言語実態の一端を明らかにすることを目指し、江戸・東京語による文献を調査資料に、否定要素を含む表現構造を、意味・機能の両面から考察したものである。筆者が2015年春に提出した博士論文『江戸・東京語における否定表現構造の研究』がもとになっている。

本書の構成は、「巻頭言(小野正弘)」、「まえがき」、「凡例」に続いて、「序章」、「第一部 近世後期から明治期にかけての否定表現の系譜」、「第二部 否定表現構造における否定要素と文法カテゴリー」、「終章」となっており、末尾に、「参考文献」、「あとがき」、「索引」を付す。第一部は、「第1章 近世後期江戸語における否定表現」、「第2章 明治期東京語における否定表現」、「第3章 第一部のまとめ」の3章で構成され、第二部は、「第4章 丁寧体否定形マセヌからマセンへの交替」、「第5章 丁寧体否定形マセンとナイデスの併存」、「第6章 複数の否定要素を含む述語部の構造」、「第7章 否定表現構造と文法カテゴリー」、「第8章 第二部のまとめ」の5章で構成される。

なお、本書は、2017年度明治大学大学院文学研究科学生研究奨励(成果公開促進)基金の助成を受けている。(阿久澤弘陽)

(2018年5月9日発行 勉誠出版刊 A5判横組み 288頁 7,800円+税 ISBN 978-4-585-28041-5)

小林隆編『感性の方言学』

本書は、オノマトペや感動詞といった感性に関わる言葉の方言学をテーマとした論文集である。方言学でオノマトペや感動詞を扱うことのおもしろさを多角的に発掘することを目的としている。

「まえがき」にはじまり、「I 研究のための視点」、「II 地理的視野から」、「III 文学と語りの中で」、「IV 用法を記述する」、「V 歴史的展開を追う」の五部構成となっている。第1部は、「第1章 日本列島のオノマトペ研究に向けて(浜野祥子)」、「第2章 オノマトペの機能の東西差——言語的発想法の視点から——(小林隆)」、「第3章 オノマトペと感動詞に見られる「馴化」(定延利之)」、「第4章 オノマトペに関する三つの思い込み(半沢幹一)」。第2部は、「第5章 オノマトペを用言化する動詞と接尾辞の地理的分布(竹田晃子)」、「第6章 地方議会におけるオノマトペの使用分布(高丸圭一)」、「第7章 オノマトペ使用頻度に対する意識の地域比較——主観的使用頻度および居住地・出身地による使用頻度イメージの違い——(平田佐智子)」。第3部は、「第9章 宮澤賢治初期童話作品のオノマトペ——基本要素からの加工と展開——(小野正弘)」、「第10章 東北地方の民話に見るオノマトペ表現の特徴(川崎めぐみ)」。第4部は、「第11章 青森県五所川原市方言の感動詞「アツァ」

について(田附敏尚)],「第12章 富山県方言の「ナ(一)ン」「ナモ」——否定を表す多機能形式の談話での運用——(小西いずみ)],「第13章 出雲方言における感動詞類「け(一)」について(有元光彦)」。第5部は,「第14章 語彙の感動詞の発達——高知方言の驚きの感動詞から——(船木礼子)],「第15章 上方・大阪語におけるコ系感動詞の歴史(深津周太)」。末尾に,「索引」と「執筆者紹介」を付す。(阿久澤弘陽)

(2018年5月10日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 256頁 5,200円+税 ISBN 978-4-89476-898-7)

小林隆編『コミュニケーションの方言学』

本書は,コミュニケーションの地域差についての研究を切り拓くことを目的に,コミュニケーションの方言学をテーマとした論考を集めた論文集である。

「まえがき」に続いて,「I 研究のための視点」,「II 方言コミュニケーションの姿」,「III コミュニケーションに見る方言」,「IV 歴史の中のコミュニケーション」,「V 将来のための資料論」の5部構成。第I部に「第1章 コミュニケーションの地域差の研究に向けて——試論——(熊谷智子)],「第2章 言語行動の変異を捉える——多角的な観点からの検討——(篠崎晃一)],「第3章 あいさつの方言学のこれまでとこれから(中西太郎)],「第4章 儀礼性と心情性の地域差——市間の会話に見る——(小林隆)」、第II部に「第5章 「断り」という言語行動にみられる特徴——全国通信調査データから——(岸江信介)」「第6章 大分県方言の依頼談話(杉村孝夫)],「第7章 大分方言談話に見るコミュニケーション力(松田美香)],「第8章 愛知県方言談話に見られる話者交替についての考察——会話を楽しむ——(久木田恵)],「第9章 モノログ場面に見られるあいづちの出現間隔の違い——大阪と東京の雑談の対比から——(太田有紀)],「第10章 若年層における談話展開の方法の地域差——東京方言,大阪方言の比較を中心に——(琴鍾愛)」、第III部に「第11章 長野県方言敬語の発想と表現——敬意終助詞が担う親しみと敬い——(沖裕子)],「第12章 接続詞の語形変化と音変化——方言談話資料からみた接続詞のバリエーション——(甲田直美)],「第13章 テレビインタビューの応答場面に見られる方言使用——30年前の岡山県における引用の助詞「と」の省略——(尾崎喜光)],「第14章 LINEの中の「方言」——場と関係性を醸成する言語資源——(三宅和子)」、第IV部に「第15章 関西における掛け合い型談話の由来と展開——漫才と日常会話の相互作用——(日高水穂)],「第16章 近世・近代における授受補助動詞表現の運用と東西差——申し出表現を中心に——(森勇太)],第V部に,「第17章 ロールプレイ会話による参加型方言データベース構築の試み(井上文子)」が掲載されており,全17章。末尾に「索引」と「執筆者紹介」を付す。(阿久澤弘陽)

(2018年5月10日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 256頁 5,800円+税 ISBN 978-4-89476-897-0)

高田博行・小野寺典子・青木博史編『歴史語用論の方法』

『歴史語用論入門——過去のコミュニケーションを復元する——』(高田博行・椎名美智・小野寺典

子編, 大修館書店, 2011年), 『歴史語用論の世界』(金水敏・高田博行・椎名美智編, ひつじ書房, 2014年)に続く, 日本語による歴史語用論に関する論文集。当該の時代の社会・文化といった歴史的コンテクストを取り込んだ「語用論的フィロロジ」に関する論考と, 新たな意味の誕生・変化を追求する「通時的語用論」に関する論考で構成される。

「第1章 序章」に続き, 「第1部 語用論的フィロロジ」には「第2章 辞書のなかの語用論——18世紀ドイツにおける日常語への眼差し——(高田博行)」、「第3章 キリシタン版対訳辞書にみる話しことばと書きことば(岸本恵実)」、「第4章『枕草子』の対話的な文章構造(藤原浩史)」、「第5章 従属節の配置に見る読者との対話——『カンタベリ物語』の最終話「牧師の話」をめぐって——(家入葉子)。「第2部 通時的語用論1《形式—機能の対応づけ》」には「第6章 構文化アプローチによる談話標識の発達——これまでの文文化・(間)主観化に替わるアプローチ——(小野寺典子)」、「第7章 準体助詞「の」の発達と定着——文文化の観点から——(青木博史)」、「第8章 ネットワーク語の名詞化辞 = *gu* の意味拡張——16世紀から現代における文文化と(間)主観的意味への変化——(桐生和幸)」、「第9章 ドイツ語の前置詞 *wegen* の歴史の変遷——文文化と規範化——(佐藤恵)」、「第10章 副詞「ちょっと」の感動詞化——行為指示文脈における用法を契機として——(深津周太)。「第3部 通時的語用論2《機能—形式の対応づけ》」には「第11章 前置き表現から見た行為指示における配慮の歴史(川瀬卓)」、「第12章 中世後期における依頼談話の構造——大藏虎明本狂言における依頼——(森勇太)」、「第13章 古代語の係り結び・現代語のノダ構文・沖縄語の係り結びの比較(新里瑠美子)」、「第14章 16世紀の英語ポライトネス——立場依存的な多義性と誠実さ——(スーザン・フィッツモーリス(中安美奈子訳))。第2章から第14章の稿末に「文献解説」を, 末尾に「索引」を付す。(田中佑)

(2018年5月17日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 352頁 3,600円+税 ISBN 978-4-89476-885-7)

服部四郎編, 上野善道補注『日本祖語の再建』

日本語の系統および日本祖語に関する古典的名論考を集めた本書は, 以下の20章からなる。「第1部 日本語の系統」には「第1章 日本語の系統」、「第2章 日本語はどこから来たか?」、「第2部 日本祖語について」には「第3章 八丈島方言について」、「第4章 琉球方言と本土方言」、「第5章 日本祖語の母音体系」、「第6章 日本祖語について」、「第7章 琉球語源辞典の構想」、「第8章 音韻法則の例外——琉球文化史への一寄与——」、「第9章 やま, もり, たけ」、「第3部 上代日本語の母音体系」には「第10章 上代日本語の母音体系と母音調和」、「第11章 上代日本語のいわゆる“8母音”について」、「第12章 上代日本語の母音音素は6つであって8つではない」、「第13章 講演「橋本進吉先生の学恩」補説」、「第14章 奈良時代中央方言の音韻の再構について」、「第15章 過去の言語の音韻共時態再構の方法——「上代日本語」を例として——」、「第4部 琉球諸方言および本土諸方言」には「第16章 沖縄の言語と文化」、「第17章 〈書

評) 平山輝男著『琉球方言の総合的研究』, 「第 18 章 急を要する琉球諸方言の記述的研究」, 「第 19 章 日本語諸方言のアクセントの研究と比較方法 秋永一枝さん及び金田一春彦君へのお答え」, 「第 20 章 方言区画論・周囲論と基礎語彙統計学」を収める。冒頭・巻末に補注者による「解説」, 「あとがき」のほか, 「参考文献」, 「初出一覧」, 「索引」, 末尾には著者・補注者略歴を付す。(前田直子)

(2018 年 5 月 19 日発行 岩波書店刊 A5 判横組み 672 頁 13,000 円+税 ISBN 978-4-00-061268-5)

小柳智一著『文法変化の研究』

本書は, 既存の理論に依拠することなく, 日本語史を材料として「ことばの変化」の内実に迫ろうとするものである。日本語史における豊富な事例に基づく言語変化のモデルが提示されており, また, 付章には, 通言語的研究との対話の一例として古代日本語のムード・テンス・アスペクトに関する論考が収められている。

本書の構成は次のとおりである。「序章 言語の歴史, 言語変化, その記述」に続き, 「第 1 章 言語変化の段階と要因」, 「第 2 章 言語変化の傾向と動向」, 「第 3 章 機能語生産」, 「第 4 章 文法的意味の源泉と変化」, 「第 5 章 文法変化の方向」, 「第 6 章 文法変化の方向と統語的条件」, 「第 7 章 語彙・文法変化——内容語生産と機能語生産——」, 「第 8 章 「主観」という用語——文法変化の方向に関連して——」, 「第 9 章 対人化と推意」, 「第 10 章 文法変化と多義化——意味の重層化をめぐって——」, 「第 11 章 文法制度化」, 「第 12 章 消失の言語変化——抑制・廃棄——」, 「付章 古代日本語研究と通言語的研究」。末尾に, 「資料」, 「参考文献」, 「初出」, 「あとがき」, 「索引」を付す。(田中佑)

(2018 年 5 月 28 日発行 くろしお出版刊 A5 判横組み 304 頁 3,400 円+税 ISBN 978-4-87424-768-6)

岡崎友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太編『バリエーションの中の日本語史』

本書は, 金水敏氏の還暦を記念して 2016 年 4 月 30 日と 5 月 1 日に行われた, 研究発表会「バリエーションの中での日本語史」(主催: 大阪大学大学院文学研究科日本文学・国語学研究室, 共催: 土曜ことばの会)での発表を元に, 数編の論文を加えて編まれたものである。

内容は次のとおりである。「存在表現とアスペクト」には「東北諸方言の存在表現とアスペクト・テンス(高田祥司)」, 「日本語諸方言における被動者項を指向するパーフェクトの他動詞文の多様性(竹内史郎)」, 「市来・串木野方言の静態化体系(黒木邦彦)」, 「存在型アスペクトの文法化のバリエーション——宮古狩俣方言からの示唆——(衣畑智秀)」, 「リスト存在文について(金水敏)」。「指示表現の地理・歴史的研究」には「中古のカ(ア)系列とソ系列の観念指示用法——古典語における知識の切り替わりから——(藤本真理子)」, 「現代語・中古語の観念用法「アノ」「カノ」(岡崎友子)」, 「直接経験が必要ない記憶指示のアノ(堤良一)」。「非情の受身」の発達をめぐって」には「非情の受身」のバリエーショ

ン——近代以前の和文資料における——（岡部嘉幸）」、「ラル構文によるヴォイス体系——非情の受身の類型が限られていた理由をめぐって——（志波彩子）」、「可能表現における助動詞「る」と可能動詞の競合について（青木博史）」。「スタイルと役割語」には「役割語の周縁の言語表現を考える——「人物像の表現」と「広義の役割語」と「属性表現」——（西田隆政）」、「書き手デザイン——平賀源内を例にして——（渋谷勝己）」、「行為指示表現「～ておくれ」の歴史——役割語度の低い表現の形成——（森勇太）」、「比喩によって生じるキャラクター属性——ラベルづけられたキャラクターの観点からみた——（大田垣仁）」。末尾に、「資料」、「参考文献」、「初出」、「あとがき」、「索引」を付す。（田中佑）

（2018年5月29日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 304頁 3,700円＋税 ISBN 978-4-87424-766-2）

藤田保幸・山崎誠編『形式語研究の現在』

本書は、平成26～28年度科学研究費補助金による研究課題「日本語の多様な表現性を支える複合辞などの「形式語」に関する総合研究」（基盤研究（B）、課題番号26284064）の研究成果を集約したものである。同編者による『複合辞研究の現在』（和泉書院、2006年）、『形式語研究論集』（和泉書院、2013年）に続く論文集であり、上記の研究課題の報告書に収められた論考に加筆等を行ったものに新たな論考を加えた、28篇の研究論文と1篇の文献目録が収められている。和泉書院研究叢書499として刊行された。

内容は次のとおりである。「はじめに」に続き、「古代語における形式用言を用いた複合辞とその用例（小田勝）」、「中古語の複合辞ニソヘテについて（辻本桜介）」、「近世における副詞「なんと」の働きかけ用法——感動詞化の観点から——（深津周太）」、「逆接確定辞を含む〔接続詞〕の歴史（矢島正浩）」、「「頃」の用法と歴史的变化——現代語・中古語を中心に——（岡崎友子）」、「明治・大正期のニオケル——連体タイプと非連体タイプの消長——（三井正孝）」、「「（だ）からこそ」「（だ）からといって」「（だ）からか」について（馬場俊臣）」、「経緯を表す「～というので」という言い方について（藤田保幸）」、「比例関係を表す形式語の表現——「につれて」「ほど」「だけ」「すればするほど」などをめぐって——（森山卓郎）」、「「分」の副詞用法と名詞用法（江口正）」、「〈対立〉と〈並立〉——「取り立て」の体系構築をめざして——（藪崎淳子）」、「使役動詞「V-（サ）セル」の状態詞化——使役動詞性の希薄化のひとつの類——（早津恵美子）」、「性質・状態・動作を表す名詞述語文の「連体型」と「単独・連用型」——「文末名詞文」の解消——（丹羽哲也）」、「複合辞の「ものだ」と「ことだ」について——形式語としての「もの」「こと」の観点から——（高橋雄一）」、「分析的な表現手段の存在意義——可能性の形式をめぐって——（宮崎和人）」、「現代日本語における「動詞＋〈其他否定〉表現」構文の実態（茂木俊伸）」、「時代小説におけるノデアッタ・ノダッタ（揚妻祐樹）」、「「～てございます」の使用傾向の推移——「～てある」「～ている」との対応関係に注目して——（服部匡）」、「国会会議録における質問終了場面の敬語（森勇太）」、「形態論的特徴から見た複合辞——「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の形態論情報を利用して——（山崎誠）」、「西日本方言における「と言う」

条件形の提題用法——富山県砺波方言の「ユータラ」と広島県三次方言の「イヤー」——（小西いずみ）, 「関西方言の知識共有化要求表現の地域差——シヤンカ類のバリエーションの発生メカニズム——（日高水穂）, 「関西方言における名詞・形容動詞述語否定形式ヤナイ・ヤアラヘン・トチガウの諸用法（松丸真大）, 「形式語と虚辞（山東功）, 「中級以降で指導が必要なテシマウの用法について——学習者と母語話者の使用状況調査に基づく考察——（砂川有里子）, 「形式名詞「つもり」と意志表現——中国語と対照して——（中嶋孝幸）, 「日本語における単一格助詞「に」を伴う複合格助詞とそれに対応する朝鮮語の表現について——対照言語学からのアプローチ——（塚本秀樹）, 「日本語系クレオール語（Yilan Creole）の形式動詞・覚書（真田信治）, 「方言の形式語関係文献目録（小西いずみ）。末尾に、「英文目次」, 「執筆者一覧」を付す。（田中佑）

（2018年5月30日発行 和泉書院刊 A5判横組み 608頁 13,000円+税 ISBN 978-4-7576-0876-4）

八木下孝雄著『近代日本語の形成と欧文直訳的表現』

本書は、「one of the ~ est 最も…の中の一つ」や「from the ~ point of view …の見地からすれば」, 「in a sense 或る意味に於て」のような「欧文直訳的表現」の成立と定着の過程を明らかにしようとするものである。欧文直訳的表現の成立については明治期の英語教育・学習で用いられていた教科書とその訳本を資料に、定着については明治期の翻訳小説、翻訳の啓蒙書、夏目漱石と芥川龍之介の作品を資料に議論を行っている。

内容は次のとおりである。「はじめに」, 「序章」に続き、「第1部 英語教育・英語学習における訳出法」には「第1章 New National 1st Readerにおける訳出法」, 「第2章 New National 2nd Readerにおける訳出法」, 「第3章 New National 3rd Readerにおける訳出法」, 「第4章 第1部のまとめ」。「第2部 翻訳文における訳出法」には「第1章 The Boscomb Valley Mystery の翻訳における訳出法」, 「第2章 Self-Help の明治期翻訳における訳出法」, 「第3章 第2部のまとめ」。「第3部 翻訳以外の文章における欧文直訳的表現」には「第1章 夏目漱石の文章における欧文直訳的表現」, 「第2章 芥川龍之介の文章における欧文直訳的表現」, 「第3章 第3部のまとめ」が収録され、「終章」にて全体の結論が述べられる。末尾に「参考文献」, 「初出一覧」, 「おわりに」を付す。

なお、本書は、著者が2013年度に明治大学に提出した博士論文「近代日本語における欧文の直訳による表現の研究」に加筆・修正を行ったものであり、「2017年度 明治大学大学院文学研究科学生研究奨励（成果公開促進）基金」の助成を受けて刊行されたものである。（田中佑）

（2018年5月31日発行 勉誠出版刊 A5判横組み 232頁 6,500円+税 ISBN 978-4-585-28040-8）